

国際仏教学大学院大学研究紀要  
第 27 号 (令和 5 年)

Journal of the International College  
for Postgraduate Buddhist Studies  
Vol. XXVII, 2023

元官版大蔵経研究 (一)  
—現存テキストの概観—

池 麗 梅



# 元官版大蔵経研究（一）

## —現存テキストの概観—

池 麗梅

漢文仏教大蔵経には、写本と刊本という二つの形態がある。しかし、十世紀の北宋時代に史上初の刊本大蔵経即ち開宝蔵が登場して以降、仏教の思想的基盤として、今日に至るまで東アジア地域における仏教の伝承とその研究の発展を支えてきたのは刊本大蔵経なのである。その時代を区分するならば、刊本大蔵経は、宋元時代を中心とする中世の大蔵経、明清時代の近世の大蔵経、二十世紀以降に現れた近代の大蔵経に分けられる。竺沙雅章氏は、この中での宋元時代の刊本大蔵経を、その版式等の形式的特徴、成立・流布した地域、目録構成の異同によって、開宝蔵・契丹蔵・江南諸蔵という三つの系統に分類している<sup>1</sup>。

この分類方法に順うと、北宋から元代までの間に成立した刊本大蔵経の各系統間の相異、更には同一系統に属する諸蔵間の継承関係も明らかになるのである。つまり、この分類方法は、宋遼時代に起源をもつ諸系統がそれぞれに金元時代を経て明清時代へと展開していく、大蔵経史を体系的に俯瞰する上で、極めて有効なのである。ただ、このような分類を行うに際して、竺沙氏は各大蔵経のテキスト内容を比較することには意を注いでおらず、各系統間の関連性、いわば横のつながりに対する視点が完全に欠落している憾みがある。氏の類型化がもつ、この「欠点」も一因

---

<sup>1</sup> 竺沙雅章氏は、まず 1990 年に東方学会の第 40 回会員総会における「宋元版蔵経の系譜」と題する講演の中で刊本大蔵経系統の分類法について公表し、その概要は後に『東方学』第 81 輯に掲載された。更に、より詳細な内容を大谷大学における講演で発表し、その原稿は 1993 年に『漢訳大蔵経の歴史—写経から刊経へ—』という小冊子で出版されるに至った。これらの口頭発表を踏まえ集大成した研究成果は、2000 年に出版された『宋元仏教文化史研究』（東京：汲古書院）に見える。

となつてであろう、宋・遼・金の時代と明・清時代とを中継したはずである元代の大蔵経に関しては、それが属するテキストの系譜、大蔵経史における位置付け、そしてそれが有する時代的意義について、現在に至るまで明らかになっていないところが多いのである。

元代に伝存していた大蔵経は、成立した時代によって分類すると、前代の南宋や金から受け継いだ大蔵経と、元代において開板された大蔵経とに分けられる。例えば、磧砂蔵所収の妙巖寺本『大般若経』巻一の巻末に見える刊記から、文宗至順三年（1332）に妙巖寺で『華嚴経』、『涅槃経』、『大宝積経』、『大般若経』の四大部経を開板するに当たり、校本として「大都弘法、南山普寧、思溪法宝、古閩東禪、磧砂延聖之大蔵」という、当時では代表的な刊本大蔵経が採用されたことが判明している。「思溪法宝」（思溪蔵）と「古閩東禪」（福州東禪寺蔵）の二種は宋代に成立したものであるが、「大都弘法」（弘法蔵）、「南山普寧」（普寧蔵）、「磧砂延聖之大蔵」（磧砂蔵）の三種は、元代に新たに開板または続刻・改編された刊本大蔵経である。筆者は、宋代に成立し元代に伝わった大蔵経と明確に区別するために、元代に開板・続刻・改編された大蔵経を「元代刊本大蔵経」と総称することにする。

元代刊本大蔵経は、その刊本大蔵経としての系譜に着目すると、南北二つの系譜に分けられる。例えば、大都の弘法蔵は開宝蔵から金蔵を経る中原大蔵経の系譜に属し、元普寧蔵と元磧砂蔵は宋代の東禪寺蔵・思溪蔵を受け継ぐ江南系統の大蔵経である。こうして見ると、宋代の刊本大蔵経と同様に、元代刊本大蔵経にも明確な地域性があることが分かる。具体的には、北方では、元と同じく燕京（金では中都、元では大都と呼ばれる）に都を置いた前朝の金から受け継いだ「金蔵」の板木を元代に再編成した「弘法蔵」が主流であった。南方では、宋代の東禪寺蔵や思溪蔵を継承して、元代に普寧蔵と磧砂蔵が生まれ、その影響力は徐々に全国へと拡大していった。

このように、竺沙氏の類型化に従つてみても、元代刊本大蔵経には、宋代において南北に分かれた刊本大蔵経それぞれの系譜を受け継ぐもの、という一面があることが明らかとなる。しかし、ここで、次のような疑問

が生じてくるのである。「それでは、元代刊本大藏經に、その独自性はないのであろうか」。また「元代は独自の大藏經を生み出すことができなかつたのであろうか」。竺沙氏の分類方法は、大藏經史研究にとって画期的なものではあるが、元代刊本大藏經に関しては、このような疑問を抱かせし、また、それに十分な答えを与えてくれるものではないのである。

筆者は、およそ百年前に再び姿を見せ始めた元代の官版大藏經（以下、「元官藏」と略称する）に注目し、諸先行研究を踏まえながら、当該大藏經の現存する伝本とその雕印、同藏の形式的特徴や全体的構成などを検討し、当時としては最高の水準を誇った元代官版大藏經に凝縮されている時代的特性を明らかにしたい。そこで、本論文では、その第一歩として、日中の両国に伝わる元官藏のテキストについて概観したい。

## I 謎の大藏經

梶浦晋 [2010] (447 頁) が指摘するように、元官藏に関する最初の記録は、鵜飼徹定 (1814-1891 年) の『訳場列位』 (1863 年)<sup>2</sup>に現れる<sup>3</sup>。同書では、「武州縁山経閣元本藏」の「大般若卷四百七十一」の項目に、元

<sup>2</sup> 『仏教大学図書館蔵貴重書図録』によれば、『訳場列位』は「浄土宗の僧侶、鵜飼徹定 (1814-1891 年) の著。法隆寺、西大寺、高山寺、増上寺その他で閲覧した諸經に附された經典の訳場に関与した諸人の役分、官位などを列挙したものを記録して後人の参考に資したものである。『古経題跋』とならんで、日本仏教界における考証学の嚆矢となる。」と言う。

<sup>3</sup> 梶浦晋「日本の漢文大藏經収蔵及其特色—以刊本大藏經為中心—」、『版本目録学研究』第 2 輯 (国家図書館出版社、2010 年、436-457 頁。なお、同論文は、最初に、2007 年九月、上海師範大学宗教研究所主催「漢文大藏經國際學術研討会」で公表された後、『藏外仏教文献』第 2 編総第 11 輯 (375-408 頁) に掲載された。後に、同論文の日本語増訂版 (図版あり) が『東アジア海域交流史 現地調査研究：地域・環境・心性』第 3 号 (2009 年) に掲載され、その中国語版は『版本目録学研究』第 2 輯 (国家図書館出版社、2010 年) に公表されている。本書では、同論文の 2010 年版 (『版本目録学研究』第 2 輯) の内容を参照している。

官蔵に特有の、至元二年（1336）太皇太后ト答失里<sup>フタシリ</sup>による「施印願文」、大藏經の銓經・対校を担当した学僧の名簿（以下、「僧名録」と呼ぶ）、印造事務等を担っていた徽政院官僚の名簿（以下、「職官録」と呼ぶ）が全文、移録されている。

なお、その実物は、長い間、所在不明であったが、2021年6月6日に北京で開催された保利春季オークションに出品された『鎌倉諸刹残本合巻』（1帖）の中から見つかった<sup>4</sup>。この『鎌倉諸刹残本合巻』は、数種類の刊本經典の經切を貼り合わせて、一冊にしたものである。複数の經切に「珍賞」、「徹定珍藏」という蔵書印が捺されていることから、鶉飼徹定の旧蔵品だったと推測されている。同本の冒頭に江戸末期の漢学家大槻磐溪（1801-1878年）が題した「七奇」という二文字があり、中間に「武蔵国荏原県八幡山森厳寺住持比丘孝純導可雲不及識焉」という識語をもつ偈頌が<sup>5</sup>、末尾にも可雲が安政三年（1856）に記した跋文が見える<sup>6</sup>。可雲（生年不明-1860年）は伊勢（三重県）の出身、八幡山森厳寺の住持であり、法名は孝嘗純導、号として可雲、頤神堂、只申庵不及道人、雨月窓、

<sup>4</sup> 参照：「<https://auction.artron.net/paimai-art5185952130/>」。

<sup>5</sup> 可雲による題記に「此処得餘白而偶就（或いは「然」）書感。昔者經家乏剡藤、銘心背誦對青灯、今成充棟書千萬、魚蠹多於閱藏僧。政長冬日武蔵国荏原県八幡山森厳教寺住持比丘孝純導可雲不及識焉。」右上に「第一義」（朱印）、左下に「八幡山房」（朱印）が捺されている。なお、文字と朱印の判読は、方廣鋤先生からご教示を頂いた。ここに記して感謝を申し上げます。

<sup>6</sup> 可雲跋に「世伝金沢文庫及称名寺蔵書印、儒書以墨、仏書以朱踏之云。余嘗見儒書朱印者、今此帖中又有仏以墨印者、仏而墨、儒而朱、一奇也。鹿島蔵經、一本跋尾曰『建長七年乙卯十一月九日於鹿島社遂供養常州笠間前長門守從五位上行藤原朝臣』、於神祠而仏經供養、二奇也。修禪寺蔵者、昔年平二位尼公所置而後移于我三縁山、所謂三大蔵之一也。今此零本也、蓋彼寺別蔵之殘簡者歟？蔵外之蔵本、三奇也。極楽寺在昔有四十九院、云妙光院或其一乎。当寺開山伝略曰『戒本摺写与僧尼三千三百六十卷』今此律疏又其類乎。印中有『常住』之字而亡其人、四奇也。『大般若經』刻版唐土、而料紙皇国者、五奇也。至元經跋之位署、人則華而名則夷者、六奇也。嗚呼。僅僅數紙、殆集半千年外之奇、是復奇之太奇者也。実可不曰希世之珍帖哉。丙辰（1856）冬日看畢題矣、山田守僧導可雲。」とある。

淡菜翁がある。可雲は古經、古版本に対する関心が高く、鶉飼徹定とも親しかった<sup>7</sup>。

更に、オークションサイトの解説に拠れば、『鎌倉諸刹殘本合卷』には計七種、八点の經切が含まれており、その最後の一種が即ち元官藏『大般若經』卷471（本文は1紙3面であり、その他に卷尾1面と刊記11面、附補写至元二年太皇太后願文1面がある）である<sup>8</sup>。『大般若經』卷471の本文卷末（1紙3面）、及び附録の僧名録（3面）と職官録（7面）はいずれも元官藏の原本であるが、經典本文と僧名録の間にある至元二年の太皇太后の「施印願文」（1面）は補写されたものである。当該補写部分の直前に、やや小さい文字で「可雲所藏元版經跋文一紙、今編摹宜統次下署名也」と見えることから、これは可雲が所有する別の元官藏に付された願文を模写して補ったものであることが分かる。すると、鶉飼徹定の『訳場列位』に見える至元二年の施印願文は、元官藏の『大般若經』卷471に元々あったものではなく、可雲が模写して補ったものを転写したことになる。従って、鶉飼徹定が実際に見た元官藏本『大般若經』卷471には、僧名録と職官録のみであったということになるのである。

一方、小野玄妙は、1927年の「至元二年刊元官版大藏經の跋文に就て」<sup>9</sup>に続き、1930年に「元代松江府僧録管主八大師の刻藏事跡」<sup>10</sup>を公表し、

<sup>7</sup> 可雲の略歴は、二楞学人（小野玄妙）[1927]「至元二年刊元官版大藏經の跋文に就て」（『現代仏教』1927年11月号、54-63頁）を参照（特に62-63頁）。

<sup>8</sup> 元官藏以外の収録經典は、(1) 金沢文庫旧藏・南宋単刻本『涅槃經疏三德指帰』卷三（卷首5面）、(2) 日本鎌倉中期刻經『大乘起信論義記』卷下（3面）、(3) 金沢称名寺旧藏・南宋兩浙東路轉運司単刻本『曇無德四分律刪補隨機羯磨』卷下（卷首10面）、同『四分律比丘舍注戒本』卷下（卷尾5面）、(4) 鹿島神宮旧藏・思溪藏本『御製緣識』卷四（5面）、(5) 豆州修禪寺旧藏・開元寺版『大宝積經』卷三六（卷尾3面）、(6) 極楽寺妙光院旧藏・鎌倉刻本『四分律刪補隨機羯磨疏』卷三下（15面）の6種7点である。

<sup>9</sup> 二楞学人（小野玄妙）[1927]「至元二年刊元官版大藏經の跋文に就て」、『現代仏教』1927年11月号、54-63頁。

<sup>10</sup> 小野玄妙[1930]「元代松江府僧録管主八大師の刻藏事跡——大普寧寺本以外の元官版經特に管主八僧録の刊本に就いて」、『仏典研究』第2巻第13号、1-10頁。

後者の論文には「元順宗至元二年刊官版大蔵経（東京中谷在禪氏蔵）」と題する図版と願文の積文（7-9頁）を載せている。それらの原本は心法寺の中谷氏が所有していた『頤神堂集古帖』から見付かっているが、中谷氏に拠れば、同帖は森巖寺の可雲が編集した数冊の中の三冊目に当たる。

『頤神堂集古帖』は、前述の『鎌倉諸刹残本合巻』と同様に、数種類の古版経の経切を集めて一冊にしたものであるが、その末尾に見えるのが、元恵宗（順帝）朝の至元二年（1336）に太皇太后ト答失里（ブタシリ）が大蔵経三十蔵を施印した際の願文と、その大蔵経の銓経・対校を担当した学僧や析成局大使等の政府官僚の名簿である。この可雲旧蔵の『頤神堂集古帖』に見える「施印願文」が、『鎌倉諸刹残本合巻』所収の『大般若経』巻471に補写された願文の底本なのであろう。

『頤神堂集古帖』から見出された元官蔵の願文等は、発見された時には既に經典本体から切り取られた状態であったが、元々は、いずれの大蔵経テキストの巻首或いは巻末に付随していたものであろう。そして、太皇太后の「施印願文」の内容、また僧名録や職官録というものの性質から推察して、この大蔵経は特定の個人や地方の寺院が主体となって成立した、いわゆる私版ではなく、皇族が発起人となって全国から学僧を選抜・召集し中央政府の官僚を参与させて完成させた官版の大蔵経だった、と小野玄妙が推測した。これによって、元代独自の官版大蔵経は、遅くとも恵宗（順帝）至元二年（1336）までには雕造されていたということが、初めて明らかになったのである。

このように、鶴飼徹定と小野玄妙が願文等に光を当てたことによって、元官蔵の存在が知られることになったのである。ただ、両氏とも經典の本体部分には考察を及ぼさなかったので、元官蔵の形式的特徴、全体的構成、テキスト系譜等については未解明なままであった。それら元官蔵の実態が明らかになるのは、更に半世紀以上も後のことだったのである。

## II 中国雲南省図書館所蔵の元代官板大蔵経

日本において元官蔵の印経願文・僧名録・職名録について報告されて



から、凡そ六十年が経過した 1979 年に、中国雲南省図書館で、元惠宗（順帝）至元二年（1336）の太皇太后ト答失里の願文をもつ刊本大藏經の印本が数十巻、発見された。当時は元官版大藏經に関する知識が不足していたため、最初の調査を担当した于乃義氏は、それらの新出本の内の 13 巻は元「弘法藏」の遺品であろう、という暫定的な判定を下した。その後、1983 年末から 1984 年初めにかけて、中国社会科学院の童瑋氏・方廣鋤氏、雲南省図書館の金志良氏が同刊本に対する再調査を行った。その結果、雲南省図書館から発見された元代刊本大藏經の中、それまで「弘法藏」とされていた 12 巻を含む、計 32 巻の印本（以下、「雲図本」と略称する）が元惠宗（順帝）至元二年頃に施印された官版大藏經の遺品であることが判明したのである。

「雲図本」を千字文帙号の配列順に示せば、以下の通りである。

- (1) 『大般若波羅蜜經』巻 261（成 27 壹）
- (2) 『大般若波羅蜜經』巻 262（成 27 二）
- (3) 『大般若波羅蜜經』巻 266（成 27 陸）
- (4) 『大般若波羅蜜經』巻 266（別本）
- (5) 『大般若波羅蜜經』巻 267（成 27 七）
- (6) 『大般若波羅蜜經』巻 268（成 27 捌）
- (7) 『大般若波羅蜜經』巻 269（成 27 玖）
- (8) 『大般若波羅蜜經』巻 505（巨 51 五）
- (9) 『小品般若波羅蜜經』巻 3（鱗 69 三）
- (10) 『大宝積經』巻 41（始 81 一）
- (11) 『仏説大方等大集經菩薩念仏三昧分』巻 10（湯 104 十）
- (12) 『無言童子經』巻上（道 108 五）
- (13) 『自在王菩薩經』巻上（道 108 七）
- (14) 『大集大虚空藏菩薩所問經』巻 6（拱 110 陸）
- (15) 『仏説阿惟越致遮經』巻 2（恭 153 九）
- (16) 『大方便仏報恩經』巻 6（器 189 六）
- (17) 『仏説法集經』巻 4（欲 190 四）

- (18) 『仏説頂生王因縁經』 卷 1（作 207 肆）
- (19) 『不空罽索陀羅尼自在王呪經』 卷下（堂 222 四）
- (20) 『菩提場莊嚴陀羅尼經』（事 243 壹）
- (21) 『觀自在大悲成就瑜伽蓮華部念誦法門』（川 273 三）
- (22) 『弥沙塞部五分律』 卷 24（友 362 四）
- (23) 『四分律藏』 卷 21（切 365 一）
- (24) 『五分比丘戒本』 卷 24（仁 369 七）
- (25) 『根本説一切有部毗奈耶藥事』 卷 16（虧 384 六）
- (26) 『十地經論』 卷 7（物 398 染）
- (27) 『釈摩訶衍論』 卷 4（啓 444 四）
- (28) 『釈摩訶衍論』 卷 5（啓 444 五）
- (29) 『衆經目錄』 卷 2（密 563 二）
- (30) 『衆經目錄』 卷 5（密 563 五）
- (31) 『続高僧伝』 卷 8（雞 629 八）
- (32) 『大慧普覚禪師住徑山能仁禪院語録』 卷 1（治 649 一）

童瑋、方廣錫、金志良の三氏は原本の調査結果を踏まえて「元代官刻大藏經的發見」（1984）<sup>11</sup>という論文を連名で公表し、上掲 32 卷の元代官板大藏經の概要を紹介した。同論文によれば、先ず、「雲函本」は折本装幀で、版式は 1 版 42 行、1 紙 7 面、1 面 6 行、1 行 17 字である。元官藏の版式は、折本の装幀と 1 行 17 字の文字配列は江南諸藏と類似しているのだが、1 版 30-36 行（1 紙 5-6 面、1 面 6 行）とする江南諸藏より大判であり、特に天地が双行の子持ち罫線になっている点が従来の刊本大藏經とは異なっている。次に、全 32 卷の中で、「大大徳寺藏」の長方朱印（巻首・巻末）が捺されているのは計 15 卷（上掲の (1)、(2)、(4) - (8)、(11) - (13)、(15)、(16)、(19)、(20)、(22) の各巻）、舍利塔・釈迦説法図の扉絵（1 版 6 面）をもつものは 7 卷（上掲の (1)、(3)、(10)、(17)、

<sup>11</sup> 童瑋・方広錫・金志良「元代官刻大藏經的發見」、『文物』1984 年第 12 期、82-86 頁、7 頁（図版）。

(20)、(21)、(23)の各巻)<sup>12</sup>である。更に、恵宗（順帝）至元二年の太皇太后卜答失里の施印願文（巻首に1版4面）と僧名録（巻末に1版3面）があるのは、(1)『大般若波羅蜜経』巻261と(20)『菩提場莊嚴陀羅尼経』の2巻、職名録（巻末）が附されているのは(32)『大慧普覚禅師住徑山能仁禅院語録』巻1のみである。最後に、同論文の結論によれば、32巻の「雲図本」は、すべて同じ時期に印造されたものではないが、同じ大蔵経板から刷られた印本であると推定されている。

### III 日本対馬仁位東泉寺所蔵の元代官板大蔵経

中国雲南省図書館所蔵の元代刊本大蔵経が元「弘法蔵」ではなく、元官蔵であることが判明したのと同じ年に、日本でも元代刊本大蔵経が発見された。1983年、村井章介氏が率いる調査チームが長崎県対馬市にある仁位東泉寺で雲南省図書館所蔵の元代刊本大蔵経と同じ版式をもつ大蔵経印本を発見した。この原本調査の結果は、村井章介氏が1986年に公表した「対馬仁位東泉寺所蔵の元版新訳華嚴経について—弘法蔵残巻の発見—」<sup>13</sup>に詳しい。同論文(23頁)によれば、東泉寺所蔵の五部大乘経（長崎県指定文化財、計89帖）の現存状況は、以下の通りである。

- ①『摩訶般若波羅蜜多経』2帖
- ②『大方等大集経』2帖
- ③『大方広仏華嚴経』77帖（A系列71帖・B系列6帖）
- ④『大般涅槃経』7帖
- ⑤『仏説像法決疑経』1帖

<sup>12</sup> その中の(20)『菩提場莊嚴陀羅尼経』の扉絵に「陳寧刊」とあるが、この刻工「陳寧」は同時代の磧砂蔵の扉絵を製作した「陳寧」と同一人物である、と考えられている。

<sup>13</sup> 村井章介 [1986] 「対馬仁位東泉寺所蔵の元版新訳華嚴経について—弘法蔵残巻の発見—」『仏教史学研究』第28巻第2号、1986年。また、同氏著『アジアの中の中世日本』（校倉書房、1988年）にも所収。本書は、1986年の論文を参照している。

この中、⑤『仏説像法決疑經』1帖は日本の「応永二十一年五月十六日の刊記を持つ鹿苑院版」であり、①、②、④は中国の刊本大蔵經の一種とされた。近年、東泉寺本に対する調査研究が進むに連れて、新たな事実が判明してきた。梶浦晋 [2019A]「謎多き元官版大蔵經」の解説には、①、②、④、⑤はいずれも室町時代に開板された「和版」であり、⑤『仏説像法決疑經』の巻末に見える「応永二十一期（甲午）五月十六日就于／万年山鹿苑院五部大乘經形木新開板畢／奉行本紹／相奉行礼高」との刊記に拠って、「相国寺の塔頭鹿苑院で開版された五部大乘經の内の一つであることがわかる」と言う。また、①『摩訶般若波羅蜜多經』については、「巻二の原刊記に『檀越成忠郎趙安国一力刊此經一部三十卷』とあり、磧砂版大蔵經本を底本として覆刻されたものである」と指摘している<sup>14</sup>。

これらの和版本と較べて、当初から一際大きな注目を浴びたのは、③『大方広仏華嚴經』（77帖、すべて『八十華嚴』）であった。計77帖もの『八十華嚴』は、千字文帙号に基づいて、AとBという二系列に分類された。その中、B系列に分類された六帖（巻13・巻30・巻39・巻40・巻53・巻61）は元代の磧砂蔵或いは普寧蔵などの江南大蔵經系統の印本と推定された。一方、A系列に分類された71帖（巻11・巻13・巻25・巻30・巻39・巻40・巻53・巻61・巻63を除く、『八十華嚴』の計71巻分に相当）は、当初、元代官板大蔵經の「弘法蔵」である、と推測されていた。

村井氏によれば、A系列の『八十華嚴』は「臣117帙」から「体124帙」までの八帙に配置されているが、この配置の方法は、歴代諸蔵の中では、『至元録』とだけ合致している。更に、A系列諸本の装幀の特徴として、折本装であり、版式は1版42行、1紙7面、1面6行、1行17字、そして天地の界線が双行であることが挙げられている。A系列諸本は施印願文、僧名録、職官録こそ附されていないが、その折本装幀・版式・双行天

<sup>14</sup> 梶浦晋 [2019]「謎多き元官版大蔵經」（『版經東漸—対馬がつなぐ仏の教え—』、太宰府：九州国立博物館、47-49頁）、48頁。

地界線・扉絵の特徴に注目すれば、「雲図本」との類似性は明らかである。なお、村井氏によれば、「雲図本」の千字文表記法（「啓四」「事壹」「治一」など）は千字文の函号（「啓」・「事」・「治」など）と冊数の数字（「四」・「壹」・「一」など）とを組み合わせたものであるが、A系列諸本には、巻22を除けば、すべて千字文函号だけが標記されている。この千字文表記法の相違に着目した村井氏は、A系列諸本の成立は「雲図本」よりも古い、と推測したのである。

しかし、竺沙雅章「元版大藏經概観」（初出は1998年）<sup>15</sup>が指摘するように、東泉寺本『八十華嚴』（A系列）は「雲図本」と同種の元代官版大藏經本であり、元「弘法藏」の印本ではない。なぜなら、元「弘法藏」は金藏の「校補増広本であるから、十四字詰の卷子本であったとみられ、17字詰折帖本のこの版経とは様式が異なる」（349頁）ので、17字詰の折本装丁の東泉寺本が元「弘法藏」とは考え難いからである。

更に、梶浦晋[2019B]「元の官版大藏經」<sup>16</sup>は、「元官版は、折帖装で1行の字数は17字と江南諸藏系と一致するが、1版の行数が42行と大きく異なる。また天地の界線が双線であることも、これ以前の大藏經とは異なる。ちなみに明代以降の折帖装の大藏經の天地の界線は双線である。千字文函号は、弘法藏と同じく『至元録』によっており、東泉寺本はこれに合致している。」と述べている。これは、東泉寺本元官藏の系統に関する最新の説である。

#### IV 新たに確認された元代官版大藏經

元代官版大藏經の遺品は、二十世紀末以降、続々と報告されている。例

<sup>15</sup> 竺沙雅章氏の「元版大藏經概観」の初出は『西大寺所収元版一切經調査報告書』（奈良県教育委員会、1998年、7-20頁）であり、後に、『宋元文化史研究』（東京：汲古書院、2000年）の第二部第四章に「元版大藏經概観」（336-360頁）として再録されている。本書は、『宋元文化史研究』の再録版を参照している。

<sup>16</sup> 梶浦晋[2019B]「元の官版大藏經」、『版経東漸—対馬がつなぐ仏の教え—』、55頁。

えば、竺沙雅章 [2000] 「元代の大藏經」によれば、元代官板大藏經本の『八十華嚴』として、東泉寺本の他に、京都でも 2 帖（個人所蔵の巻 51 と巻 72）の現存が確認されている<sup>17</sup>。中国でも、雲南省社会科学院図書館で元代刊本大藏經『文殊師利所説不思議仏境界經卷下』（千字文帙号「国 92 三」）の残巻が発見された<sup>18</sup>。これは、巻頭に附されている 6 面の扉絵、折本装幀、1 版 42 行、1 紙 7 面、1 面 6 行、1 行 17 字という版式、天地の子持ち罫線といった形式的な特徴から<sup>19</sup>、元代官板大藏經の遺品であることは間違いない。

近年、中国国内では元官蔵の遺品が続々と出現するようになった。後に中国国家図書館によって収蔵された 9 帖も含めて、古書市場に現れた元官板大藏經本に関しては、李際寧 [2008] 「關於近年發現的《元官蔵》」<sup>20</sup>に詳しい。以下は、主として同論文を参照しつつ、近年、古書市場に現れたことが確認された元官蔵を、可能な限り、網羅的に紹介したい。

#### IV.1 中国国家図書館所蔵の元官蔵

2006 年 3 月、李際寧氏の尽力により、以下の 9 帖もの元官蔵が中国国家図書館に所蔵されることになった<sup>21</sup>。

<sup>17</sup> 竺沙雅章 [2000] 「元代の大藏經」（平成 11 年度春季公開講演会講演要旨）、『大谷学報』第 79 巻第 3 号、47-58 頁）。個人蔵の『八十華嚴』巻 51 と巻 72 を東泉寺所蔵の同経巻 51 と巻 72 と比較研究することが期待される。

<sup>18</sup> 何梅（執筆）「元代的刻本大藏經」、李富華・何梅『漢文仏教大藏經研究』（宗教文化出版社、2003 年）に所収。

<sup>19</sup> 宋綺・畢先弟「雲南省社会科学院図書館館蔵雲南民族調査資料推介」（『雲南社会科学』2008 年第 6 期、34-35、92 頁）、92 頁。

<sup>20</sup> 李際寧氏は、2007 年 10 月に漢文大藏經国際學術研討会（上海）で「關於近年發現的《元官蔵》」という口頭発表を行った後、『蔵外仏教文獻』（第 2 編総第 13 輯、2010 年）に投稿し、2008 年 3 月には当該論文の修訂版を『国際仏教学大学院大学研究紀要』第 12 号（85-110 頁）に掲載している。本書は、2008 年版的論文を参照している。

<sup>21</sup> これら 9 帖の「元官蔵」本が中国国家図書館の所蔵に帰した経緯については、李際寧「元官蔵入蔵国家図書館紀実」、『蔵書家』（96-101 頁）に詳しい。

- ①劉宋・求那跋陀羅訳『大法鼓經』卷上（千字文帙号「念206一」）
- ②北宋・法賢訳『宝授菩薩菩提行經』（千字文帙号「念206五」）
- ③北宋・施護等訳『仏説頂生王因縁經』卷2（千字文帙号「作207伍」）
- ④北宋・施護等訳『仏説頂生王因縁經』卷3（千字文帙号「作207六」）
- ⑤北宋・施護等訳『仏説頂生王因縁經』卷4（千字文帙号「作207柒」）
- ⑥北宋・施護等訳『仏説頂生王因縁經』卷5（千字文帙号「作207八」）
- ⑦北宋・施護等訳『仏説頂生王因縁經』卷6（千字文帙号「作207玖」）
- ⑧唐・菩提流志訳『一字仏頂輪王經』卷3（千字文帙号「宝236六」）
- ⑨北宋・天息災奉訳『大方広菩薩藏文殊師利根本儀軌經』卷3（君244三）

新たに所蔵された元官蔵本に対する精査を行った後、李際寧氏は以下のような所見を明らかにした。先ず、上掲9帖とも折本装で、橘色の厚紙表紙があるが、題簽などは見当たらない。一帖ごとに、表紙より更に厚い橘色の帙で包まれており、帙の正面には長方形の題簽、題箋の下には円形の帙号簽が貼られている。題箋には当該巻の経題、帙号簽には当該帙の千字文帙号が印刷されている。9帖はいずれも、紙高・紙幅・版式などの形式的特徴がすべて一致し、版首に板木の通し番号が刻まれているが、刻工名は見当たらない。天地の子持ち界線、1版は7面で1面6行、計42行であり、1行17字という特徴から、元代官版大藏經に間違いのない。その版式は南方系統大藏經の装幀を踏襲したか、或いは影響を受けているだろう。経典本文の字体はやや細長く、秀麗端正で、「磧砂蔵」「普寧蔵」の書風に近い。

次に、9帖とも巻首と巻尾及び版心に刻まれている千字文函号、特に巻尾の帙号は、一貫して、正式な漢数字（“陸”）で表記されていることが特徴である。例えば、『仏説頂生王因縁經』卷3の場合、首題の下に「作六」とあるが、版心には「作陸卷三」（即ち千字文“作”函第6冊、卷3）とある。

最後に、9帖とも楮紙を使用しており、染色せず、紙の繊維が見え、紙

質は均等で、薄いのが丈夫である。宋元時代の折本装幀の大藏經は1版6面が一般的だが、元官蔵は1版7面42行の大判であるため、1版につき2枚の料紙を繋ぎ合わせて印刷されている<sup>22</sup>。

#### IV.2 上海・竜華古寺所蔵の元官蔵

##### ①唐・沙門不空訳『菩提場所説一字頂輪王經』卷3（千字文帙号「父242三」）

同本は折本装で、首尾とも完備し、千字文帙号は「父三」である。2006年に嘉徳秋オークションを経て、現在は上海・竜華古寺に収蔵されている<sup>23</sup>。

##### ②北宋・沙門施護等訳『仏説頂生王因縁經』卷1（千字文帙号「作207肆」）

同本は折本装で、首尾とも完備し、千字文帙号は「作肆」である。2006年12月4日の上海敬華芸術品オークション有限公司による出品を経て、現在は上海・竜華古寺に収蔵されている<sup>24</sup>。

#### IV.3 個人蔵の元官蔵

##### ①後秦・鳩摩羅什訳『大智度論』卷32（千字文帙号は不明）

同本は折本装で、首尾ともに残欠し、現存部分に千字文帙号は見当たらないが、版式から元代官板大藏經の遺品であることが判明している。1998年に北京海王村オークション有限責任公司によって買収されたが、現在の所有者等は不明である<sup>25</sup>。

<sup>22</sup> 李際寧 [2008]、(横組) 89-97頁。

<sup>23</sup> 李際寧 [2008]、(横組) 87頁。

<sup>24</sup> 李際寧 [2008]、(横組) 87頁。

<sup>25</sup> 李際寧 [2008]、(横組) 87頁。



### ②唐・実叉難陀訳『大方広仏華嚴經』卷 65（千字文帙号「壹 123」）

同本は、2019年12月14日に上海博古齋オークション有限公司が主催した2019年秋季芸術品オークションに出品され、現在の所有者等は不明である。折本装で、版式は1版7面、1面6行、1版42行、1行17字であり、天地に子持ち界線があつて、版心に「壹五卷 一」（つまり、「壹字函第五冊の第1版」を表す）等となっているのは元官蔵に典型的な特徴である。全巻が計12版からなり、縦31.3糎、全長は950糎に上る。首題の下に千字文帙号「壹」があり、尾題の隔行に「音釈」があり、末尾に「壹五卷 十二版尾」とある。表紙は淡い青色の絹で仕立てられ、その上に明るい黄色の絹題簽が貼られている。巻首に配された六折の扉絵に釈迦說法図と「皇図永固 帝道遐昌 仏日増輝 法輪常転」と刻まれた「蓮花座碑碣式牌記」があり、巻尾には韋陀天像が附されていて、これが明代の装幀であることは明白である<sup>26</sup>。なお、これと同様の特徴をもつものとして、下記の「⑩唐・実叉難陀訳『大方広仏華嚴經』卷 76（千字文帙号「体 124」）」がある。

### ③唐・実叉難陀訳『大方広仏華嚴經』卷 76（千字文帙号「体 124」）

同本は折本から改装された卷子本で、巻の端に千字文帙号「体」が見える。巻首に明代の仏說法図の扉絵があり、巻尾に明代の補写がある。2003年頃までは個人蔵だったが、2006年6月3日の嘉徳春季オークションを経て、2007年の徳宝オークションに出品されたのを最後、現在の所有者等は不明である<sup>27</sup>。オークションサイトで公開されている書誌情報及び二枚の写真から分かるように<sup>28</sup>、全巻が計13版からなり、版式は1版7面、1面6行、1版42行、1行17字であり、天地に子持ち界線があつて、首

<sup>26</sup> 同本に関する紹介は、雅昌オークションのサイトに見える出品説明に基づいてまとめられた。参照：<https://auction.artron.net/paimai-art5163581005/>（2019年12月29日にアクセス）。

<sup>27</sup> 李際寧 [2008]、(横組) 87頁。

<sup>28</sup> 同本に関する紹介は、雅昌オークションのサイトに見える出品説明に基づいてまとめられた。参照：<https://auction.artron.net/paimai-art39962019/>（2019年12月29日にアクセス）。

題の下に千字文帙号「壹」とある。巻首に配された1版6面の扉絵に釈迦說法図と「皇図永固 帝道遐昌 仏日増輝 法輪常転」と刻まれた「蓮花座碑碣式牌記」があり、明代の装幀であることは明白である。なお、これと同様の特徴をもつものとして、上記の「⑩唐・実叉難陀訳『大方広仏華嚴經』巻65（千字文帙号「壹123）」がある。

④西晋・竺法護訳『等集衆徳三昧經』巻上（千字文帙号「鞠 155 壹」）

同本は、2018年12月3日に北京の榮宝オークション有限公司が主催した2018年秋季芸術品オークションに出品されたもので、現在の所有者は不明である。折本装（縦32.6×横11.5 糎）で、版式は1版（界高24-24.6 糎、幅78.5 糎）7面、1面6行、1版42行、1行17字であり、天地に子持ち界線、版心に「鞠壹卷 一」（つまり、「鞠字函第1冊の第1版」を表す）等とあるのは元官蔵に典型的な特徴である<sup>29</sup>。

⑤北宋・法賢訳『仏説尊那經』・『仏説布施經』、北宋・施護訳『仏説大方広未曾有經善巧方便品』（三經合巻同冊）（千字文帙号「念 206 四」）

同本は折本装で、首尾とも完備し、千字文帙号は「念四」である。2007年9月15日、北京中安太平国際オークション有限公司によって出品されたが、現在の所有者等は不明である<sup>30</sup>。

⑥北宋・法護等訳『仏説除蓋障菩薩所問經』巻二（千字文帙号「聖 208 二」）

同本は折本装で、首尾とも完備し、千字文帙号は「聖二」である。2006年に北京海王村秋オークションを経て個人蔵となったが、現在の所有者等は不明である<sup>31</sup>。

<sup>29</sup> 同本に関する紹介は、雅昌オークションのサイトに見える出品説明に基づいてまとめられた。参照：<https://auction.artron.net/paimai-art5137351353/>（2019年12月29日にアクセス）。

<sup>30</sup> 李際寧 [2008]、（横組）88頁。

<sup>31</sup> 李際寧 [2008]、（横組）87-88頁。

⑦唐・菩提流志訳『广大宝楼阁善住秘密陀羅尼經』卷上（千字文帙号「宝236一」）

同本は折本装で、首尾とも完備し、千字文帙号は「宝一」である。巻首に至元二年の太皇太后の施印願文、巻尾に職官録及び僧名録がある。2007年9月15日、北京中安太平国際オークション有限公司のオークションに初めて現れたが、現在の所有者等は不明である<sup>32</sup>。

⑧唐・不空訳『菩提場所説一字頂輪王經』卷4（千字文帙号「父242四」）

同本は折本装で、首尾とも完備し、千字文帙号は「父四」である。2005年に北京海王村春季オークションを経て個人蔵となったが、現在の所有者等は不明である<sup>33</sup>。

⑨唐・不空訳『菩提場所説一字頂輪王經』卷5（千字文帙号「父242五」）

同本は折本装で、首尾とも完備し、千字文帙号は「父五」である。2005年に北京・海王村オークションを経て蔵書家韋力氏の個人コレクションに入って、現在に至る<sup>34</sup>。

⑩唐・阿質達霰訳『大威力烏枢瑟摩明王經』（千字文帙号「事243」）

同本は折本装で、首尾とも完備し、千字文帙号は「事243」である。具名は『金剛恐怖集会方広軌儀觀自在菩薩三世最勝心明王大威力烏枢瑟摩明王經』であり、個人蔵である<sup>35</sup>。

⑪唐・不空訳『仏説一髻尊陀羅尼經』、『不空罽索毘盧遮那大灌頂光真言』二經同帖（千字文帙号「事243」）

同本は折本装で、首尾とも完備し、千字文帙号は「事243」である。同帖

<sup>32</sup> 李際寧 [2008]、(横組) 88頁。

<sup>33</sup> 李際寧 [2008]、(横組) 87頁。

<sup>34</sup> 李際寧 [2008]、(横組) 87頁。

<sup>35</sup> 李際寧 [2008]、(横組) 108頁。

に『仏説一髻尊陀羅尼經』と『不空羼索毘盧遮那大灌頂光真言』が収録されており、個人蔵である<sup>36</sup>。

李際寧氏は、上掲した「1、中国国家図書館所蔵の『元官蔵』（9帖）、「2、上海・竜華古寺所蔵の『元官蔵』（2帖）、「3、個人蔵の『元官蔵』の一部（⑤-⑪の7帖）の計18帖は、料紙、形態、版式、書風そして装潢が一致していることから、いずれも同時期に同じ場所から出現したものであろう、と推定している。

以上の通り、元代官版大藏經の実物は、日本では東泉寺本の71帖、京都個人蔵の2帖、中国では「雲図本」の32帖、雲南省社会科学院図書館の1帖、中国国家図書館所蔵の9帖、上海竜華古寺所蔵の2帖、個人蔵11帖の計128帖、及び『鎌倉諸刹残本合巻』に収録されている『大般若經』巻471の断片が現存することが確認されている。これらの現存諸本の中で、デジタル画像で全巻が公開されているのは、「雲図本」だけである。

<キーワード>

大藏經、元代、官版大藏經

[付記] 本研究は JSPS 科研費基盤研究 (C) 「元代官版大藏經の総合的研究と大藏經系譜論の再考」(JP22K00060) の助成を受けたものです。

---

<sup>36</sup> 李際寧 [2008]、(横組) 108 頁。

Summary

A Study of the Official Buddhist Canon of  
the Yuan Dynasty (I):  
Existing Texts in China and Japan

CHI Limei

The wood-block Buddhist Canons in the Yuan Dynasty can be divided into the Canons inherited from the previous Song and Jin dynasties, and those which were produced in the Yuan Dynasty. In order to distinguish them from the Canons established in the Song and Jin and transmitted to the Yuan Dynasty, the Canons that were produced, re-carved and recompiled in the Yuan Dynasty are collectively referred to as the "Canons of the Yuan Dynasty".

The Canons of the Yuan Dynasty include: the Hongfa Canon in the capital Dadu, the Puning Canon in the south, and other Jiangnan Canons, and the official Canon of the Yuan Dynasty which was identified a hundred years ago. Focusing on the official Buddhist Canon of the Yuan Dynasty, I intend to refer to the previous researches, examine the characteristics of the Canon and its catalog structure according to the existing texts, and consider the epochal significance of the Canon. As the first step of this research, this paper will discuss the existing texts of the Canon circulated in China and Japan.

*Professor,  
International College  
for Postgraduate Buddhist Studies*